HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	補足及びコメントに答えて
Author(s)	陳, 省仁
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113, 51-53
Issue Date	2011-08-22
DOI	10.14943/b.edu.113.51
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46991
Type	bulletin (article)
File Information	113Chen-2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第113号　2011年8月

補足及びコメントに答えて

陳　　省　仁

Replies to Comments and Additional Remarks

Shing-Jen CHEN

養育性を学校教育にという拙文の提案に対して，川田が養育性という概念は特定な価値判断を含まれるため，学校教育で取り上げるのは問題だとコメントした（川田論文）。川田によれば，科学者は価値の判断に関与してはならないと考えるため，価値判断に関与すると思われる養育性の現象は学校教育において取り上げるべきでない。学校教育における教科の学問に対する川田が取った立場を「第3人称的立場」と呼び，それについての管見を最後に述べる。ここで川田の指摘に対して，筆者は学校教育で生徒や学習者を全て学者や研究者として教育すべきではないという考えを述べることに留める。

川田が更に現代の大学生若者の中に自らの養育性形成を切望するものが近年増えているという興味深い事実を指摘した。しかし，現行のカリキュラムでは若者たちのこのような切望に応えていないのが現状のようだ。指摘されたこの現象は少なくとも2つの事実を示唆しているように思われる。一つは，拙文が指摘した養育性形成不全という現象は根拠のないことではないということ。むしろ，多くの大学生達の自覚と切望が養育性形成不全という事実の裏付けであるとさえ言えると思われる。もう一つは拙文で提案した学校教育における養育性形成の教育は大学生においても意味があることと考えられる。

次は伊藤によるコメントに答える（伊藤論文）。先ず，拙文が高度経済成長期以前の日本社会の人間発達のニッチとそれ以降現在までの約40年間と比較して，後者は養育性形成不全と述べた。しかし，先に指摘しておきたいのは，高度経済成長期以前の時期は決して伊藤が理解したように「若年層において養育性が形成されるのに十分な「発達のニッチ」が家庭や地域社会に存在していた」のではない。拙文のこのあたりの議論はあくまでも比較した場合の話であり，絶対的なことではない，むしろ高度経済成長期以前の時期を「より多くの人がかろうじで養育性のミニマムを身につけている」と考えるべきである。そして，近40年の養育性形成不全の時期と比べて，少子化や育児困難の問題がそれほど重篤でなかったとすれば，地域社会の育児へのサポートの機能はまだある程度存在したためと考えられる。

伊藤は養育性教育が試験で評価するのは困難であるためその実行の可能性を疑問視した。この指摘に対して，2つの点で答えたい。先ず，教科の内容が百パーセントの確信がなければ教育ができないと考えるべきでないと思う。無論，だから内容の把握はいいかげんで良いと主張するわけではない。現行の教科も長年の模索と改良の結果と考えれば，養育性の教育についても，当面は不確定で多少の試行錯誤もやむを得ないと思う。しかしこれは技術の問題であり，原理的に不可能ではないであろう。もう一つは，拙文の提案の狙いは，養育性形成の教育の導入によって，学校教育の在り方について再考する契機にすることである。そして，学校教育にお

いて，試験は大きな意味を持つが，試験がすべてを先行する，あるいは試験がすべてではないと考えるべきである。従って，「養育性は試験で評価し難いだから教育に適しない」にはならないのではないか。

伊藤のコメントの冒頭に，「社会を構成する人々ひとりひとりの自由を最大限保証する」ことを強調して，養育性を「身につけていようといまいと，どう生きるかは個々人の任意である」と主張した。拙文で養育性のことを指摘したのは正に伊藤の主張に対する疑問から出発したのである。確かに個人の生き方は自由である。我々の生きている時代は例えば優生学や人種の純潔などの大義名分で個人の人権を犠牲にすることができる時代ではない。しかし拙文が指摘したいのは，もし社会の成員の多くが自分の自由だという理由で子育てしないのであれば，社会に種々の不都合が生じる（現にこの 20 年来日本社会がその不都合の一端に直面している）。極端の場合，社会の存続自体さえ保証できない。また，社会が若者の養育性形成に力を入れること，或いは学校で人間発達のことをカリキュラムに導入することは個人の自由や人生を妨害することにはならない。現在学校で物理学，化学，数学や外国語などの教育を実施しているが，将来外国語や物理学を使う必要がない，使わない，使いたくない人の人生や自由がそれによって妨害されるとは考えていないと同じように。

高橋論文は育児雑誌の分析を通して，拙文で議論した養育性を補完する学校教育の役割の重要性についての議論を展開した（高橋論文）。拙文の立場から，育児雑誌の発行部数や読者数の消長と養育性形成とどのような関係があるのかという問題に興味を感じる。また，育児雑誌の読者と非読者の間に，養育性の形成において違いは見られるかどうかのも興味深い問題と思われる。更にこのいずれの問題も回顧的研究が可能と思われる。

宮盛論文は国民の教育権の立場から養育性形成教育との関係性と可能性について議論した（宮盛論文）。基本的に，国民の教育権の立場からも拙文の主張が支持できると理解したが，間違いないでしょうか。宮盛は精神科医の斎藤学「だいたい，あなたにわかるのは自分のことだけで，正しい判断を下せるのも，その判断に責任を持てるのも，自分のことだけです。〔中略〕その人にとって何が正しいか知っているのは，『本人』だけなのです。その人には，自分のことを自分で何とかする力があります」を引用しながら，個人の限界と自己責任のことを強調した。養育性の議論の中私がちょっと違うことを考えていた。言うなれば，養育性の神髄は「ほどほどの相手思いのデシャバリである」。

最後に，小論は現代日本社会の問題である少子化と子ども虐待を含む育児の困難を近数十年来日本社会の若者たちの養育性形成不全と結びつけて議論をしたが，私のもう一つの関心は日本の学校教育の在り方である。否，現在は少子化の問題というよりも，むしろ日本の学校教育の在り方の方が真の問題と考えている。特に近年イギリスの在野の教育者 Ken Robinson の考え方に接してから益々そう思うようになった（Robinson, 2009）。

Ken Robinson は現代世界のいたるところに行われている公的教育のあり方を批判している。彼によれば，現在はグローバルスタンダードになった学校教育の特徴の一つは年齢を基準とする生徒を大量生産する体制である。このような体制下，多くの生徒の自主性や創造性は窒息させられ，学校教育の修了頃には，大多数の生徒の知的好奇心が蕩尽される状態になると指摘する。筆者から見れば，このような批判はもっぱら人を驚かすだけが目的とする詭弁ではない。Robinson の指摘によれば，現代世界の公的教育の歴史的時代背景はヨーロッパの産業革命であり，公的教育の目的は急に増える生産工場の労働力の要求に応えるものであった。中・高等教育の重要

な役割は労働者を管理できる管理者や政府の役人の養成であったと。

日本の学校教育制度は明治 19 年（1886）に発布された学校令がその法的根拠であった。19 世紀末頃に欧米のような列強の伍に入ろうとした日本も当然日本より先だった欧米社会の学校制度をその原型とした。また，日本の教育制度創始時の社会・経済的背景も Robinson が指摘した欧米の学校教育制度の社会・経済的背景と同様であり，産業振興もその背後の目的となったのであろう。問題は，学級を自明視した画一規格の生徒を大量生産方式で供給することは現代公教育の暗黙の前提になったことである（柳,2005）。これは Robinson が批判した現代教育の病の社会的・制度的背景である。学校教育のカリキュラムに養育性や人間発達の内容を取り入れないのはこれと関係する。何故なら，従来の考えにおいて，養育性や人間発達は産業振興の目的にとって直接関係がないと思われたからである。

更に，従来の教育制度において，教科科目となった学問は全て生徒や学習者にとって第 3 人称的存在である。例えば，学校で教えている算数，理科，社会などは客観的原理や知識であり，ほとんど生徒や学習者の人生や生活と無関係かのように教えている。生徒や学習者の人生や生活との関係は教えている原理や学問の応用として，あくまでも副次的なものとして扱われる。学問や原理の普遍性を強調すること自体は問題というわけではない，むしろ必要とさえ考える。しかし，生徒は将来全て学者になるわけではない。むしろほとんどの生徒は先ず自分の人生を持つ生活者である。であれば，学校教育において，生徒や学習者の生活と人生の視点から学問や原理にアプローチする，所謂第 2 人称的視点からのアプローチが必要であり，より有効と思われる。言い換えれば，学校教育において，「学問や原理ありき」から出発するのではなく，先ずは生徒や学習者の生活や人生があることを大前提とすべきではないかと考えるのである。

環境の問題が 20 世紀後半，特に 1980 年代以降地球規模的に注目され，近年学校教育にも環境科学の導入が取り組まれてきた。多くの場合，生徒や学習者の日常生活との関連から，つまりここで「第 2 人称的」という視点から学習が進められているようである。子育てや人間発達のことも正に第2人称的視点から展開することが可能だし必要である。この視点から，現行のカリキュラムのすべての教科の材料を人間発達や子育ての事象から取材すれば，従来の教科の学習が可能のみならず，生徒や学習者の生活や人生と密接関係するため，従来より良い学習結果が期待できると思われる。

引用文献

Robinson, Ken（2009）. The element: how finding your passion changes everything. New York:Viking Penguin.

柳　治男（2005）. ＜学級＞の歴史学−自明視された空間を疑う 講談社